

小幡道昭『経済原論 基礎と演習』第1篇第2章「貨幣」コメント

コメンテーター：清水 敦

【コメントと論点】

Q-1：「価値尺度」について

『資本論』では貨幣が価値表現の材料となることをもって貨幣の価値尺度機能を説明していたが、宇野弘蔵がこれを批判し独自の価値尺度論を展開したこと、またこの宇野の価値尺度論をめぐる種々議論が行われてきたことは、周知の通りである。本書における価値尺度論は、『資本論』とはことなる宇野価値尺度論の論理に基本的には沿いつつ、その後の議論も踏まえたかたちで展開されている。そして「商品の大量性と主体の複数性」、「商品の資産性と期間の関係」、「時間と空間の関係」という条件を想定して論理が構成されていることを論じるなど、興味深い論点が示されている（54-55 ページ）。

宇野価値尺度論では、貨幣による購買によって個々の商品の価値が確認されるとともに、購買が繰り返されることで価値が確認されると説かれている。本書でも、貨幣によって商品が購買され「潜在的な価値が、一定量の貨幣量として確定される」ことを「価値実現」と定義し、「貨幣の価値尺度機能とは、この価値実現の作用をいう」（51 ページ）とするとともに、「個別的な購買の積み重ねを通じて」価値が量られる関係を「個別的な実現と社会的な尺度」（55 ページ）の問題として論じている。この後者の点は、宇野理論の内部でも従来から議論のあるところなので、これについて若干コメントしたい。

著者は、「一物一価値の法則」は、「市場全体」を「一瞬のうちに見渡せる主体を暗に想定しているからいえること」で、「本書ではこのような超越的な主体は想定しない」と述べる（54-55 ページ）。他方、「価格がバラつくのは」「それぞれの固体ごとに異なる＜個別的価値＞があるからだ」という議論も退ける（55-56 ページ、287-288 ページ）。評者は、著者のこうしたスタンスに基本的には賛同する。ただし、「個別的な購買の積み重ねを通じて」「バラツキをもつ価格のうちに、同種商品の価値は社会的に計量される」（55 ページ）と論じられるさい、「バラツキ」の程度に関する説明がなされるべきであったように思われる。貨幣による「購買の積み重ね」は、「バラツキ」を解消しないとしても収束させる方向に作用すると考えられているのか否か、もし考えられているとすればそれはどのような関係を通じて実現されるのかといった点について、著者の考えを知りたいところである¹。

¹ 後の部分では「同種の商品が並んで売られている市場では、価格は相互に連鎖し、その商品価値を示す一定の水準が形成される。これを相場と呼ぶ」と述べられている（68 ページ）。この相場の形成において貨幣がどのようなかたちで、どのような機能を果たすかが知りたいわけである。

Q・2：「流通手段」について

本書の流通手段論の大きな特徴のひとつは、需要と供給の関係と関連させて議論されていることであろう。しかし、おそらく評者の解釈力が足りないためであろうが、叙述を追うだけでは十分に理解できない箇所がある。

たとえば、「販売の連鎖」を論じた箇所（58-59 ページ）で、「個別的な売買を通じて、商品の社会的な持ち手交換を実現する市場では、需要と供給が全体として一致していても、交換が実際に成立するとは限らない」と主張されている。しかし、その具体的な説明をしている 58 ページから 59 ページにかけての部分では、登場する「資本家」や「労働者」はいずれも貨幣をもたず商品を販売しようとしているように読める。流通手段論でこのような想定をすることができるのだろうか。別の箇所で「ある時点で止めてみると、これから売られようとしている商品（在庫）と同時に、買うために準備された貨幣が実在していることになる。これが本書の基底にある時間のかかる市場像である」（293 ページ）と述べられているので、このような「市場像」に反した想定のもとでは「需要と供給が全体として一致していても、交換が実際に成立するとは限らない」という趣旨なのであろうか。

また、今のべた「市場像」に係わる点であるが、「問題 34」と「問題 35」の「解答」についても、評者には趣旨が必ずしも判明とならない箇所があった。「問題 34」では 3 種類の商品が存在すると想定され、各商品の需要と供給がそれぞれ一致しているケースが取り上げられ、「問題 35」では 4 種類の商品のうち 2 つは需要と供給が一致するが、供給のみで需要がない商品と需要のみで供給がされない商品があるケースが取り上げられている。そして「問題 35」の「解答」のなかで、「図 I.2.1」（貨幣が流通しながら商品流通を媒介する経済原論の流通手段論でしばしばみられる図）の「真の意味は、両端が開いている点にある。つまり、需給一致を想定した市場像を拒絶しているのだ」と論じられている。少し前で引用した「ある時点で止めてみると…市場像である」という叙述は、これに続くものであり、この叙述そのものは流通手段論を考えるうえで重要な論点を導きださうの可能性をもっているようにも思える。しかし、流通手段を説明するために示される「図 I.2.1」のような図に即して「需供一致を想定」しているかいなかを論じることには違和感を覚える。なぜなら、需要と供給の一致・不一致は、本来、ある特定の期間をかぎって、あるいはある時点のみについてはじめて論じられるものであるのに対して、こうした図に即して説かれる流通手段機能は、それとは別の枠組みで、一定期間ないし特定時点での需給の一致・不一致を問題にしないかたちで議論されるものと考えられるからである。

Q・3：「蓄蔵手段」について

「鑄貨準備金」や「蓄蔵貨幣」の説明は明解である。そして評者には「一般的富」の部分の叙述も興味深かった。「貨幣は商品経済的富を代表する一般的富という性質をもつ。ただ、貨幣が一般的富の地位を独占しても、商品が商品経済的富でなくなるわけではない。商品もまた価値をもつものとして、つねに商品経済的富であり、立派な資産なのである」（64

ページ)と著者は述べている。これは、「2.1 価値尺度」における「商品価値の資産性」の指摘との連関で読まれるべき議論である。そして、「資産」が商品のかたちも貨幣のかたちもとりうるという論点は、そこからさらに重要で興味深い議論を導く可能性をもっているように思われる。

Q-4: 「商品売買の変形」

この著書の「第2章貨幣」の構成を宇野の『経済原論』のそれと対比させたとき、支払手段が除外されているなどいくつかの差異があるが、もっとも重要な相違は「商品売買の変形」という節が置かれ、それによって「貨幣」の章が締めくくられて、次章の「資本」へとつながる構成になっていることである。

著者は、「売って買う関係 $W-G-W'$ 」は、「商品 W を W' に変換する代表的な手順である。その意味でこれは市場取引の正則をなす。正則によって記述された構造を基本構造とよぶ。」と指摘したうえで、「貨幣は売りと買いを分離するから、この売って買う順序は可変的である。正則に対して、同じ目的を実現する、別の変則がある。」「変則によって、基本構造は変形し、変位構造をつくりだす。」と論じている(65ページ)。そして、「信用売買」、「貨幣貸借」、「販売代位」と論理を展開し、「販売代位」において「 $G-W-G'$ という運動」(76ページ)が登場することが示される。

『資本論』が $W-G-W'$ から $G-W-G'$ を導くことで資本を導出したこと、この論理に宇野が批判を加え、独自の展開方法を示したことは、周知の通りである。「商品売買の変形」と題されたこの節は、宇野『経済原論』の構成を大きく組み替え、新たな展開方法を提示したものといえる。

このような大きな意味をもつ本節について、評者は現時点で判断を示す準備が整っていない。この節の論理展開をめぐっては今後多くの論者によって活発な議論が行われることを期待し、評者も引き続き検討をしていきたいと考えている。ここでは、本節の内容について、この「変形」が「売りと買いとを分離する」貨幣の特質にもとづいて説かれていること、そして商品販売の「偶然性」(66ページ)や「販売期間のバラツキ」(67ページ)が存在するものとして市場を捉え、商品所有者の商品販売促進動機などに即して展開されていることを指摘するに止めておきたい。